『チャージング・エルクの心の歌』における ディアスポラ・インディアンの アイデンティティ

馬　場　美奈子

ネイティヴ・アメリカン・ルネサンスの代表的作家の一人，James Welch は，現代アメリカ先住民のアイデンティティ喪失と故郷回帰をテーマとする *Winter in the Blood* や *The Indian Lawyer* などの小説を書く一方，19 世紀後半の平原インディアンの抑圧と抵抗の歴史を捉え直す小説 *Fools Crow* や，神話化された「カスター将軍の最後の戦い」の意味を再考するノンフィクション *Killing Custer : The Battle of the Little Bighorn and the Fate of the Plains Indians* を著している。最終作 *The Heartsong of Charging Elk*（2000）も歴史再考小説だが，この小説は，ウェルチがフランスは Marsaille での著書サイン会で出会った男性の，自分の祖母は 1905 年に Buffalo Bill の Wild West Show の一行と共にやって来てフランス男性と恋に落ちた Lakota 族[1]の女性であるという話から発想し（Heidemann 1），更に調査旅行を重ねて書かれた作品であり（Welch *HCE* 440），ワイルド・ウェスト・ショーの一員としてヨーロッパ巡業中にインフルエンザに罹り病院に置き去りにされたラコタ族の青年を主人公として，彼の生き残りの苦闘を想像／創造しようとする試みである。

ネイティヴ・アメリカン作家・批評家の Louis Owens は，評論集 *Mixed-blood Messages : Literature, Film, Family, Place* の中で「先住民の動き」（164）を指摘し，部族の人びとは歴史，物語，自己認識を携えて移動しながら強制移住を含むすべての状況を生き延びてきたと述べており，また，Jace

Weaver も *Other Words : American Indian Literature, Law, and Culture* において，アメリカ先住民は伝統的な土地基盤と結び付いた「定住アイデンティティ」と，強制移住の歴史や移転政策による都市生活の中から生まれた「ディアスポラ・アイデンティティ」の，ふたつのアイデンティティに引っ張られる（295-96）という見解を示している。ウェルチの『チャージング・エルクの心の歌』は，1889 年にラコタ族の聖地 Black Hills からフランスの都市マルセイユに移動し，心ならずも異郷で自己再形成の試練に挑まざるを得なくなった青年の波乱万丈の 16 年間を描くディアスポラ・ロマンスであるが，そこにはウィーヴァーが指摘する「定住アイデンティティ」と「ディアスポラ・アイデンティティ」の葛藤を見ることができる。

以下，自文化の記憶を胸に異言語・異文化と対峙しつつ生きる 20 世紀転換期のアメリカ・インディアンのアイデンティティの葛藤と自己再形成の道程がどのように描かれているか，歴史的背景の表象にも留意しながら考察する。

1．故郷の喪失と伝統精神の保持

『チャージング・エルクの心の歌』のプロローグには，リトル・ビッグホーンの戦いの一年後，降伏を余儀なくされた Oglala Sioux 族（ラコタ族の一部族）と Cheyennes 族の一群が Crazy Horse に率いられて Robinson 砦に向かう情景が描かれており，主人公チャージング・エルクのディアスポラ人生は 19 世紀後半のアメリカ合衆国の西進政策に端を発する，ということが示唆されている。1876 年 6 月 25 日に起こったリトル・ビッグホーンの戦いは，George Armstrong Custer 将軍率いる 647 人の小隊が Sitting Bull の野営地に仕掛けた奇襲に始まったが，その頃，伝統的生活の保持を唱え政府への抵抗を呼びかけてきたシティング・ブルのもとには 2000 人近い戦士が集まっており（Welch *KC* 127），彼らの反撃を受けた騎兵隊が敗北を喫する結果となった。カスターが作戦に失敗し戦死したことで殉教者の神話が編み出され，それが契機となって「赤い悪魔たち」の征服あるいは絶滅への掛け声が上がったと

いう（Welch *KC* 46）。この戦いの後，多くのスーとシャイアンは降伏して保留地に入り，政府に割譲されていない土地に留まったクレージー・ホースの一群も，冬の飢えと病に苦しんだ末に 1877 年 5 月 6 日に降伏をし，また，カナダに逃れていたシティング・ブルの一行も，1881 年 7 月に合衆国に戻って降伏した。

以上が『チャージング・エルクの心の歌』のプロローグとその歴史的背景であり，主人公はプロローグで 11 歳の少年として登場する。彼は，「部族の人びとがバッファローの草原に戻ることは許されない，彼らは囚人だ」（3）ということを理解するのだが，それにも拘わらず，彼らが砦に近付くとともに歌い始めた和平の歌の歌声は「彼にはむしろ勝利の歌のように聞こえた」（4）と，語り手は語っている。ここには，文明社会への収監と平原インディアンの伝統的慣習を守る精神的自由との拮抗が表されているが，収監・保護対逃走・自由のモチーフはこの小説の中で繰り返し用いられ，プロットを構成している。

第 1 章では，マルセイユの病院に収容された 23 歳の主人公の回想の形で，Pine Ridge 保留地に送られた後のチャージング・エルク少年の足跡が簡潔に提示され，人物像の輪郭が浮かび上がる。チャージング・エルクは他の子供たちと共に学校に入れられたものの，一年足らずのうちに親友と一緒に学校から逃走し，以後 9 年間，時折 Stronghold と呼ばれる丘に行って狩猟生活を営み，老いたメディシンメンたちの助けを借りて伝統的な慣習を続け，また，「時にはブラック・ヒルズに馬を乗り入れて金鉱の鉱夫たちから物を盗んだ」（14）ということであり，部族の伝統精神を重んじる抵抗戦士としての人物像が提示される。ブラック・ヒルズはスー族の起源の地とされる土地であり，1868 年に Red Cloud の一群と合衆国政府との間で交わされた条約でもスー族の保留地の一部として認定されていた。にも拘らず，合衆国軍は 1874 年に「軍事的・科学的遠征」（Welch *KC* 81）を実施し，更に，1876 年にリトル・ビッグホーンの戦いを仕掛けて敗北し，その結果，強権を発動して強引に合衆国政府への移譲手続きを行ったのだが，そもそも条約に反する「軍事的・科学

的遠征」の「本当の目的」（Welch *KC* 84）は，金鉱の存在を確認することだった。だから，チャージング・エルク少年の窃盗行為は，植民地主義の侵略に対するアンチコロニアルな異議申し立て・反撃として読むことができる。そして，16 歳の時に，「今では植民者や採鉱権者に包囲された」「神聖な丘」（14）を訪れてヴィジョン・クエストを行い，また，17 歳の時にはサンダンスに参加し，「僕はいつも古い慣習に従って生き，ラコタ族の儀式にだけ参加し，白人の儀式は無視し避けようと心に誓った」（67）チャージング・エルクにとって，ブラック・ヒルズの土地に根差す部族の伝統精神と信仰は，彼が異郷に渡っても彼の「定住アイデンティティ」を支える主要な要素として機能するのである。

以上のように保留地の生活を忌避し伝統的生活を固持しようとしていたチャージング・エルクが，そもそもバッファロー・ビルのワイルド・ウェスト・ショーという，「明白な運命」を称揚する白人の商業企画に加わることになった理由は何か。それは，家族から孤立して冬の寒さと飢えに耐えねばならない生活に希望を失いかけた頃に出演者募集の話を聞き，2 年前にイギリス公演に参加した者が語ったという好ましく思える雇用条件や，海の向こうではインディアンを「偉大な首長のように扱ってくれる」（32）という噂に惹かれ，更に，ストロングホールドで共に暮らしてきた親友に説得されたからである。実在のメディシンマンの Black Elk が，壊れた「民族の輪」を救うべく，「白人の持っている秘密を学べば，いくらか人々の助けになるかも知れない」（Niehardt 218）と考えて 1887 年のイギリス公演に参加したのとは異なり，ウェルチの主人公チャージング・エルクの場合は，より個人的かつ世俗的な動機で 1889 年のヨーロッパ巡業に加わったという，リアリスティックな設定になっている。そして公演中は，彼はショーのすべてが「白人のでっちあげ」だと理解しつつも，「自分が持っている一番立派な衣装に身を包み強い馬にまたがって」「古い習慣を披露することに誇りを感じ」（52），自分の「パフォーマンスに誇りを，時には過剰な誇りを感じた」（70）のだと，描写されている。ウェルチは『カスターを殺す』の中で，馬は平原インディアンに「自由，モビリティ，

力，そして見せびらかしたいという欲望を与えた」（140）と指摘しているが，この小説においても，保留地入りに最後まで抵抗し，ショーの仲間に「ワイルド・インディアン」（125）と渾名されるバッファロー狩の名手たる主人公を造形するにあたって，「見せびらかしたいという欲望」を描き込み，それによって，病を押しての出演，落馬，骨折，入院という物語展開を説明していると言えるだろう。

病院に収容されたチャージング・エルクは，夜中に病室から遺体が運び出されるのを目撃すると，異郷の地の「癒しの家」ならぬ「死の家」で「一人で死ぬ」ことになれば，自分の魂は「この世界の向こうにある本当の世界」（23）に行けないのではないかと考え，病院から脱走する。この病院脱出のモチーフにも，学校や保留地からの逃走のモチーフにおけると同様，故郷の土地に根差す信仰に支えられた「定住アイデンティティ」が表されており，チャージング・エルクは，「Wakan Tanka の助けによって，故郷に帰る自分の道を見つけよう」（23）と決意するのだが，「ワカンタンカ」とはラコタ族の創造主たる「偉大なる神秘」であり，小説全体を通してワカンタンカに捧げる祈り，あるいはワカンタンカへの言及が繰り返される。また，「定住アイデンティティ」を支える部族の伝統精神は，ワカンタンカへの直接的言及と共に，既述した「和平の歌」など歌のモチーフにも表れる。例えば，脱走 4 日目に警官に見つかり警察に拘留されている間，衰弱し死を覚悟したチャージング・エルクは，「死に立ち向かう歌（death song）」を歌い，ワカンタンカに「今夜こそ，〔魂が〕海を渡って帰れますように」（97）と祈るのである。

チャージング・エルクは部族の伝統精神と信仰を保持しながらも，異文化に対する興味も示しており，この小説と同じく 20 世紀転換期を時代背景とする Leslie Marmon Silko の *Gardens in the Dunes*（1999）の主人公 Indigo の反応を思わせるものがある。例えば，インディゴが聖母マリア像出現の言い伝えのあるコルシカ島の学校で，母たちと共に参加したゴーストダンスの時空間を追体験するように，チャージング・エルクはマルセイユの町の広場でマリア像を教会堂に運ぶクリスマス行列を見ると，「白人が行うこの儀式」は「サン

ダンスと同じくらい神聖なものかも知れない」（66）と考え，17 歳の時に体験したサンダンスの儀式を回想する。両者は共に，異文化の現象に自文化を重ねて理解し，自己を相対化しつつ自己再確認をしている。けれども，二人の状況には大きな違いがある。白人夫婦の庇護の下に帰国を視野に入れながらヨーロッパを旅している少女インディゴは，異端的マリア信仰と自文化との類似性を発見して心躍らせるのであり，キリスト教の影響も受けたゴーストダンス，しかも会場に軍隊の制圧が入り母と生き別れになった時空間たるゴーストダンスの記憶から異端的マリア信仰に共感を覚えても，不思議ではないだろう。

一方，チャージング・エルクは，異国の夜の都会で行き暮れた迷子かつ逃亡者であり，その過酷な状況下で，白人の信仰を自らの堅い信仰から類推して理解しようとし，接近したいとも思うのだ。サンダンスの神秘的体験を想起すると共に，「ラコタの儀式にだけ参加し，白人の儀式は無視し避けようと心に誓った」ことを思い出すチャージング・エルクの描写の後に，「ところが今，白人の儀式のひとつを目撃し，彼らの聖なる家に入ってもう少し見てみたいと願う自分に気付いた。彼はそれらの人びとと一緒に中に入りたかった，暖かくて神聖なところに」（67）という描写が続く。ここには，寒さと空腹を抱えて異郷の町をさまよい，人目を避けながらも，また，自らの信仰の揺れに対して自責の念を抱きながらも，人の輪に入りたいと願う，言わば究極のディアスポラ状態にある孤独なアメリカ・インディアンの胸中にある，ジェイス・ウィーヴァー言うところの「定住アイデンティティ」と「ディアスポラ・アイデンティティ」の葛藤の萌芽が見られると言える。

しかも，人の輪に入りたいと願ったまさにその時，警官に見咎められ逮捕されるという皮肉な物語展開によって，再び収監・保護のサイクルが始動し，アイデンティティが根幹から揺るがされる。まず，浮浪者かつ感染症患者として留置所に拘留され，そして，病気回復後は，パスポートを所持せずに不法入国した犯罪者と判定され，出国許可が貰えない。先住民の各部族は合衆国政府との条約によって国内の独立したネイションと規定され，従って，個々のインディアンは合衆国民ではなく，パスポートを持っていなかったからである。この

ようにアメリカ政府とフランス政府のそれぞれの法制度に縛られ不法入国者のレッテルを貼られ，アイデンティティを剝奪されたチャージング・エルクは，親切な魚屋 Rene Soulas 氏の申し出で一時的にスーラス家に保護されることになるが，翌朝，「髪の毛を耳の辺りで切られた」自分の鏡像に慄いた時に発する，「ワカンタンカにどうやって認識してもらえるのだろうか？」，「どうすればかつてのチャージング・エルクに戻れるだろうか？」（133）などの自問には，深い自己喪失感と不安感が表出されている。

チャージング・エルクのアイデンティティ喪失の事態は更に複雑化する。彼は，同時期に病院で亡くなったショーの仲間の Featherman(2) と間違われ，死亡証明書が発行されてしまったというのだ。そこで，アメリカ副領事の Franklin Bell は，チャージング・エルクにフェザーマンのアイデンティティを引き継がせてワイルド・ウェスト・ショーの一行のもとに戻してやることを考えるが，暫くして，紛失されていた Featherman 自身の死亡証明書も見つかり，結局，マルセイユ市当局は，チャージング・エルクは存在しない，警察に逮捕・拘留されたインディアンはいなかった，と主張するに至る。つまり，本人の知らない間に平原インディアンの「誤認されたアイデンティティ」（155）は，「幽霊と言ってもよい，存在しない人」（178）にまで歪曲されるという，不条理でブラック・ユーモア的なアイデンティティ抹消状況が描き込まれているが，これは風刺であると同時に，「ディアスポラ・アイデンティティ」模索のプロットを展開するためのモチーフと考えてよいだろう。

2. ディアスポラ・アイデンティティの模索

ベル副領事がチャージング・エルクの存在を「復活させる」（180）試みをする間，チャージング・エルクはスーラス家にそのまま預けられ，4 人の家族の中に溶け込んでいくが，ベル氏からの連絡が途絶えたまま 3 年余りが過ぎた頃，チャージング・エルクはスーラス氏の保護下から脱け出て石鹸工場に就職し，アパートに転居する。13 歳の時から親元を離れてストロングホールド

の丘で自給自足の生活を営んだ経験を持つチャージング・エルクにとって，「子供のような」被保護者の生活は飽き足らないものになったからであり，また，「女性を探す自由が欲しかった」（187）からでもあり，それは即ち，成人男性としての自己探求の再開，かつ「ディアスポラ・アイデンティティ」模索の開始を意味する。しかし同時に，帰国の船賃を貯めるために，スーラス氏の魚屋の手伝いで得る収入よりも高い給料が欲しかったからでもあり，「『偉大なる神秘』には彼を帰国させる計画があるとまだ信じていた」（188）彼は，「定住アイデンティティ」を保持していることも明らかである。この時期のチャージング・エルクは，1887 年のイギリス巡業の途中で船に乗り遅れ帰国し損ねたブラック・エルクが 2 年ぶりにバッファロー・ビルの一行の野営地を訪れて帰国を願い出た時のことを思い出し，自分自身が故郷に帰る時のことを想像するが，「ブラック・エルクよりも 2 年長く」（192）故郷を離れていた自分は，「ストレンジャーたちの間で暮らすうちに思いのほか変ってしまったかも知れない」（193）と，不安まじりの思いに捕らわれている。それにも拘わらず，波止場通りにしばしば足を向けることは郷愁の表れでもあり，「ディアスポラ」と「定住」の二つのアイデンティティの葛藤を読み取ることができる。

アイデンティティの葛藤・交錯が象徴的に表れるのが，波止場通りの行き付けの食堂のエピソードである。食堂の喧騒の中にいると，たとえ一人で食事をしていても，「自分は祝祭的群集の一部だと感じる」（197）ことができて幸せな気分になるものの，よく見ると，他の客たちは日に焼けて肌の色が黒くはなっていても「すべて白人」（198）であることに気付き，居心地が悪い。さらに，憎悪を顕にしたアメリカ人水夫に侮辱され，突き倒されそうになり，「ここで殺されたら自分の魂はどうなるか」という恐怖にかられるが，逃げ道はないと分ると，「まるで一人で平原に立ち，敵に囲まれているように，突如として落ち着き決然とした態度で」，「死に立ち向かう歌」（201）を歌い始める。皆が驚き，その場の動きが止まっている間に，店員に促されて退出するのだが，後にこの事件を振り返ったチャージング・エルクは，「死に立ち向かう歌」の目的が，死に向かう勇気を奮い立たせることから他者と戦うための「魔

法の武器」に変っていたことを悟り，「自分はここで生きるべく意図されているのかも知れない。ここがホームになったのかも知れない」（204）と考える。

「ディアスポラ・アイデンティティ」を築こうとし始めた矢先に存在自体を抹殺されそうな危機に面し，「定住アイデンティティ」の構成要素たる部族戦士の歌を応用することによって生き延びる，というアイデンティティの葛藤・交錯を経て，異郷を「ホーム」として生きる可能性が示唆されたこのエピソードは，プロットの主要な転換点のひとつであり，上の引用の直ぐ後に，次の描写が続いている。

> 結果的に，彼はもう少し自信を持って振舞い，人の目を直視するようになり，アパートの近くの角を曲がったところにある浴場に出掛けるようになり，そして，ほぼ毎晩外食した。職場でも以前より自信を持ち，自分の言葉を理解してもらうためにもっと努力した。あの事件の後，彼は人目を惹くのが嫌ではなくなり，堂々と歩くようになった。（204）

このように頻繁に外出するチャージング・エルクは，つばの広いフェルト帽など派手な衣装も身に着けるようになっており，フランス社会への適応を望む男性として女性との出会いを求めている。ところが，見知らぬ通りに迷い込み，売春宿の窓越しに見かけた Marie に真剣な恋をして彼女のもとに通いつめた結果，男性同性愛者に目を付けられて，殺人を犯す羽目にまで陥り，「ディアスポラ・アイデンティティ」の探求が早くも頓挫するのであり，再び逮捕・収監のプロットが回帰することになる。

マリーが働く売春宿には同性愛者の客を接待する男性たちも雇われているが，チャージング・エルクの姿に目を留めた常連客の一人 Armand Breteuil は，マリーを脅してチャージング・エルクに睡眠薬入りのワインを飲ませ，彼が眠っている間に彼の身体を弄んだのであり，目を覚ましたチャージング・エルクは，自分を侮辱している男をナイフで刺殺する。ブルトゥイユを「悪」と見なすチャージング・エルクは事件を省察した後に，「白人がもたらした悪は

至る所に存在し」,「ひとつの悪を殺すことは 100 人の敵に一撃を与える行為に匹敵する」(297) と考え，ワカンタンカが過去 4 年間に彼に与えたすべての試練は「彼の勇気と決意を試すテストで，この最後の試練への準備だった」のであり,「彼は『悪』の喉を掻き切った瞬間，この世で与えられた時間を終えた」のだという,「彼自身の固有の認識」(298) に辿り着く。このように，異郷の地の留置所という究極のディアスポラ状態で悩み抜いた末に「彼自身の固有の認識」に達し死を覚悟するチャージング・エルクの心中の言葉には，自分を部族戦士に見立てた自己弁明の響きがあるものの，ラコタの信仰や伝統精神に根差す「定住アイデンティティ」の保持を印象付けることも確かである。

主人公が「悪」の体現者と見なす敵対的人物を殺すモチーフは，N. Scott Momaday の *House Made of Dawn* における Abel のアルビノ殺害を思い起こさせるが，裁判の場面では相違点も明らかである(3)。エイベルが簡単に陳述した後は「貝のように」口をつぐみ，白人たちが「彼らの言葉で彼のことを処置する」(108) 状況を冷ややかに観察しながら，心の中で，自分は「あのような敵」(103) を意図的に殺しのだと主張し，しかし結局，弁護士の文化人類学の知識を駆使した弁論が功を奏して 7 年間の刑期で済むのに対し，他方，チャージング・エルクは,「私は，悪に出会った時に部族の誰もがするであろうことをしたのです」(338) と述べて自分の行為を説明しようとし，ラコタ語でしか表せない信念を懸命に述べるものの，その「わけの分らないおしゃべり」の故に「最も初歩的な行動規範にも適合できない」(340) 人間と判断され,（被害者側の「挑発」が先行したことと「予め計画された殺人ではない」ことが考慮されて死刑は免れるものの）終身刑を宣告される。二人の主人公にはアメリカ先住民が白人の法制度の現場で他者化され自らの声を聞き届けてもらえない疎外状況が共通するが，チャージング・エルクの場合は，彼を「まるで見世物の野獣であるかのように」見る傍聴者たちの「好色」(318) の視線や，骨相学を専門とする医師の「野蛮人の脳は概して小さく，従って発達が遅れている」(320) という証言など，彼の身体が 19 世紀末西欧の人種差別的視線に晒される様を描き込むことによって，疎外の様相がより鮮烈に浮かび

上がるのである。

しかしながら，裁判のエピソード全体を見渡すなら，弁護士の熱心な弁論，スーラス氏の好意的な証言，新聞記者の同情的な視線などに加えて，チャージング・エルクに同情的な学生運動家，労働者，社会主義者，移民たちの抗議集会など裁判所の外の状況も描写されている。Suzanne Ferguson はウェルチがこの作品を書いたことを「ネイティヴ・アメリカとヨーロッパを和解させようとする行為」（34）と評しているが，この評言は裁判のエピソードにも当て嵌まるだろう。

3．故郷の記憶と新しい「ホーム」の発見

チャージング・エルクの「定住アイデンティティ」を支え，命そのものを支える要素は，信仰のみならず故郷の風景と生活の記憶であり，病院を脱出した翌朝，パン屋から漂う「甘い香り」が「露がおりたヨモギに朝日が当たる時」（28）の匂いを想起させ，少年時代の回想に導くのもその一例だが，「墓場」と渾名される監獄で過ごす収監期間の描写にも，それらの要素が描き込まれている。入所して 3 年後に模範囚として塀の外の畑仕事に従事するようになったチャージング・エルクは，働いている間は監獄で一生を終えねばならない運命を忘れ，生き残りへの意志を保つものの，畑仕事がない冬季の間は絶望感に襲われるが，次の引用が物語るように，故郷の記憶と信仰が彼に生きる意志を与える。

> けれども，しばしば，チャージング・エルクの絶望が頂点に達した時に雪が降ってきた。彼は頭を上げ，羽毛のような雪片が顔に降りかかりそして溶けるのを感じ，そして，まるで魔法のなせる業のように，ワカンタンカが彼に思い出させるために雪を送ってくれたかのように，キルズ・プレンティと共に過ごしたストロングホールドの冬に連れ戻されるのだった。彼の頭を駆け抜ける記憶のかずかず（中略）が，彼を「墓場」から遠く離れ

たところへ連れて行き，数日間，彼を元気付けた（sustained）。（359）

ここで使われている“sustained”という表現に「生命を支えた」という意味が込められていることは言うまでもない。

監獄で過ごす年月は，釈放後の「ディアスポラ・アイデンティティ」再構築への準備期間にもなっているが，釈放のエピソードは異国の法律と官僚主義にアメリカ先住民が翻弄される不条理な状況を再び照射する。獄中生活 10 年目，フランス政府はそれまでの措置の誤りを初めて認めた。つまり，彼の部族は合衆国との条約によって独立したネイションと規定されているから合衆国とフランスの法的協定には支配されないということをフランス政府はようやく認識し，従って，彼は一般犯罪人のカテゴリーから「政治犯として分類し直され，ここにフランス共和国から恩赦を与えられた」（361）という展開を見るのだが，このエピソードには，彼の主体が異国の政府によって一方的に「分類し直され」書き換えられるという，客体化されたアメリカ・インディアンの苦境が描き込まれている。更に，恩赦の書類に署名したチャージング・エルクが，かつてスーラス氏から「何が書いてあるか分るまで何も署名しないように」（362）と助言されたことを思い出してパニックに陥るくだりには，アメリカ先住民族が条約に「署名」することを促されて土地を失った歴史を暗示しようとする作者の皮肉な視線も窺えるだろう。

自由を得たチャージング・エルクは，農園を営む Vincent Gazier 氏の家庭に暫く引き取られることになり，監獄での農作業の経験を役立てて農園を手伝いながら自己探求を再開する。この「ディアスポラ・アイデンティティ」再構築のプロットの主軸は，ガジエ家の 17 歳の娘ナタリーとの恋と結婚である。ナタリーの側からの無邪気な愛情表現に始まるが，チャージング・エルクにとってナタリーは，彼のアメリカでの生活や彼の両親に対する関心を示し「僕を知ろうとしてくれた最初の女性」であり，その意味で「僕にとって初めての真の恋人」（395）となり，また，ナタリーは人種の差を乗り超えて「善良で，強くしかも優しい」（388）チャージング・エルクを愛すようになる，という

相思相愛の恋が，静かにかつメロドラマティックに描かれている。そして，結婚式でチャージング・エルクが身分証明書として提示した恩赦状は「フランス共和国市民としての権利と義務を言明して」いることが明らかにされ，「彼は遂に妻だけではなく市民権を取得」（403）するのである。

こうして構築された成人男性としてのアイデンティティの骨格は，マルセイユで所帯と職場を持ち，同僚の港湾労働者たちに「彼らの仲間，組合の一員として受け入れ」（416）られ，更に，父親になることが分って，肉付けされる。それでも彼は，「今でも群集の端を，いつもそうだったように孤独に歩いている」（428）という「ストレンジャー」感覚を抱いていたが，再びマルセイユにやって来たバッファロー・ビル・ショー(4)の会場を訪れて若い同胞たちに出会い，彼らの存在にラコタの生き残る力を見出して，「何年もの間見失っていた自分の一部分が帰って来たように」（435）感じ，更に，「あなたはストレンジャーではない。あなたはラコタだ，たとえどこへ行こうとも。あなたはいつも僕たちの仲間だ」（435–36）と告げられる。こうして「定住アイデンティティ」を再確認しながらも，あるいは再確認できたからこそ，同胞の誘いを断り，16 年間切望した帰郷の夢を捨て，妻と生まれてくる子供がいるフランスを「今ではホーム」として選ぶのである。

フランスに渡り都会の只中で一人置き去りにされたラコタ青年チャージング・エルクは，様ざまの，時には不条理なまでに打撃的な運命に出会うが，その度に彼はワカンタンカへの信仰と故郷の風景と生活の記憶に支えられ，「生来の堅忍不抜の性格」（Lupton 136）によって，不法入国者，病死者，殺人犯，終身刑囚，そして共和国市民と，押し付けられた存在／非在を生き抜き自己アイデンティティの再構築を繰り返した。結末で，愛する妻の国フランスを「ホーム」と呼ぶに至ったチャージング・エルクは，「ディアスポラ・アイデンティティ」を選び取りながらも，部族の伝統精神と故郷の思い出に根差す「定住アイデンティティ」を保持している。このように，異国で苦難を潜り抜け「定住」と「ディアスポラ」の複合アイデンティティを構築し積極的に生きていく

チャージング・エルクの生き残りの物語は，Gerald Vizenor が言う「サバイバンス（survivance）」の物語と呼ぶことができるだろう。ヴィズナーいわく，「先住民のサバイバンスとは生き残り（survival）以上のもの，忍耐（endurance）以上のもの」（*Fugitive* 15）であり，「サバイバルとレジスタンスの概念」（*Postindian* 79）であって，単に苦難を耐え忍んで生き延びる犠牲者の生き方ではなく，能動的に生きる姿勢なのである。

注

(1) Lakota は自らを「ラコタ」と呼ぶが，一般的には Sioux と呼ばれる。「スー」という名称は Ojibwe 族（ラコタ族とは敵対関係にあった）の言葉に由来し，もともと「小さな蛇」を意味し「敵」の意味合いも含んでいた言葉だが，毛皮貿易会社に雇われ物資を運んだフランス人たちによって転用され，かつ短縮されたものである。Barry M. Pritzker, ed., *Native Americans : An Encyclopedia of History, Culture, and Peoples* Vol. II, 472 を参照。

(2) Featherman は，作者ウェルチがこの本の末尾の「謝辞」で「フェザーマンの死亡証明書」を見る機会を得たことを記している（440）ので，実在人物の名前だと思われる。Paul Reddin によれば，インフルエンザが流行した 1889 年のヨーロッパ巡業では 4 人のインディアンが病死し，5 人が病気でアメリカに送り返された。Paul Reddin, *Wild West Shows,* 114 を参照。

(3) エイベルとチャージング・エルクの殺害行為にはもう一点違いがある。チャージング・エルクは「部族の誰でもしたであろうこと」として悪を殺すのに対し，エイベルが属す Jemez 族などプエブロ・インディアンの世界観では悪は世界のバランスを保つ一手段とされ，共同体として対処すべきものと考えられるので，エイベルが悪は破壊すべきものと即断して単独でアルビノを処罰した行為は共同体規範の違反を意味する。Susan Scarberry-Garcia, *Landmarks of Healing : A Study of* House Made of Dawn, 45 ; Charles Woodard, *Ancestral Voice : Conversations with N. Scott Momaday,* 204 を参照。

(4) 1905 年 11 月のマルセイユ公演を指す。Reddin, 148 を参照。

引用文献

Ferguson, Suzanne. "Europe and the Quest for Home in James Welch's *The Heartsong of Charging Elk* and Leslie Marmon Silko's *Gardens in the Dunes*." *Studies in American Indian Litertures* 18.2（Summer 2006）: 34–53.

Heidemann, Cindy. "Author Interview." 9 May 2002 〈http://www.pnba.org/welch.htm〉.

Lupton, Mary Jane. *James Welch: A Critical Companion.* Westport: Greenwood P., 2004.

Momaday, N. Scott. *House Made of Dawn.* 1968. New York: Perennial Library, 1989.

Neihardt, John. G. *Black Elk Speaks: Being the Life Story of a Holy Man of the Oglala Sioux.* 1932. Lincoln: U of Nebraska P, 1979.

Owens, Louis. *Mixedblood Messages: Literature, Film, Family, Place.* Norman: U of Oklahoma P, 1998.

Pritzker, Barry M, ed. *Native Americans: An Encyclopedia of History, Culture, and Peoples,* Vol. II. Santa Barbara: ABC–CLIO, 1998.

Reddin, Paul. *Wild West Shows.* Urbana: U of Chicago P, 1999.

Silko, Leslie Marmon. *Gardens in the Dunes.* New York: Simon & Schuster, 1999.

Scarberry-Garcia, Susan. *Landmarks of Healing: A Study of* House Made of Dawn. Albuqureque: U of New Mexico P, 1990.

Vizenor, Gerald. *Fugitive Poses: Native American Indian Scenes of Absence and Presence.* Lincoln: U of Nebraska P, 1998.

————, and A. Robert Lee. *Postindian Conversations.* Lincoln: U of Nebraska P, 1999.

Weaver, Jace. *Other Words: American Indian Literature, Law, and Culture.* Norman: U of Oklahoma P, 2001.

Welch, James. *Fools Crow*: New York: Viking Penguin, 1986.

————. *The Heartsong of Charging Elk.* Random House, 2000.

————. *The Indian Lawyer.* New York: W. W. Norton, 1990.

————. *Killing Custer: The Battle of the Little Bighorn and the Fate of the Plains Indians.* 1994. Penguin Books, 1995.

————. *Winter in the Blood.* New York: Harper & Row, 1974.

Woodard, Charles. *Ancestral Voice: Conversations with N. Scott Momaday.* U of Oklahoma P, 1989.

――文学部教授――